

編集後記

わが国で初めて女性首相が誕生しての初めての総選挙。衆議院限定とはいえ、強い政権が生まれたということで、腰を据えて長期的な政策に取り組んでいただきたいと思います。

本号に掲載した後沢さんの「地方消滅2」では、人口戦略会議が取りまとめた今後の人口推計と対応方向についての紹介となっていますが、2014年の「消滅可能性都市896全リスト」が時間がたってどうなったのか？ の解題となっています。世の中には検証されない各種の予想ものが多い中で、数少ない真面目な検証となっています。若干の改善がみられるものの、傾向は変わらずとのことに、心も沈んでしまいました。人口減少が止まることがなければ、地域や、地域住民が支えてきた伝統的な文化も維持できなくなるということで、あの街が、あの祭が、あの伝統料理が…。悲しいことです。

一方、夏秋啓子さんの「豆に親しむ 子どもたちの食・農そして豆育 3」では、以下の四つの、食育の構成要素と考えられますが、言葉としては馴染みの薄い「豆育」の可能性が示されています。

- ① 食べ物としての様々な豆について理解を深める学び
- ② 歴史や文化を含め、いわゆる文系の視野から様々な豆について理解を深める学び
- ③ 豆とアート・文芸の関りを通して、豆に親しみ、理解を深める学び
- ④ 農業教育の一環としての豆育

学校教育の中でできることを取り上げ、わが国に広く定着している豆食・豆文化を永続させていくための工夫として大変示唆に富んでいるものと感じています。

なお、2月10日の「世界マメの日」セミナーでは、夏秋さんから「もっと豆を！ 子ども豆育」のご講演を聞く機会がありました。前述の学校教育での工夫は、東京農業大学稲花小学校が開校して間がなく、そのため前例に縛られずに色々な工夫を凝らせたとのこと。その結果として、子ども達が豆に興味をもって接し、家庭の親御さんを巻き込み、生き活きとしている状況の話でしたが、他の小学校でも、この取組みを前例として、わが国特有の文化・食生活などに接する機会を増やせるよう展開して欲しいものだと思います。また、豆類の消費拡大のためには、SDGsの理念の紹介だけでなく、直接、豆の粒に接する機会を増やすことが大切ではないかと考えさせられました。

人口が減っても、わが国の食文化を守ってくれる人が育ってくれば、まだ救われる道が残されていると、希望もできます。

(寺田 博幹)

発行

公益財団法人 日本豆類協会
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-2-1
日土地内幸町 TEL：03-6268-8627
ビル2階 FAX：03-6268-8628

豆類時報

No. 122
2026年3月15日発行

編集

公益財団法人 日本特産農産物協会
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-15-1 フジタ TEL：03-6689-9428
人形町ビル7階 FAX：03-3663-7525
